

安積遊歩氏紹介

1956年、福島県生まれ。カルシウムを吸収しにくい骨形成不全症という障害を持つ。2歳から13歳までに、20回近く骨折を繰り返し、手術を重ねた。20代はじめから障害者運動にかかわる。

1983年10月から半年間、障害を持つ人のためのサービス機関として先駆的なアメリカのバークレー自立生活センターで研修を受け、ピア・カウンセリングを日本に紹介する。

現在、障害を持つ人の自立をサポートする「CILくーにたち援助為センター」の代表を務める。また、フィリピンの貧しい村（パンガシナン県マーシン村）に対して奨学金援助を行うNGO団体「LINK」の代表を務めていたが、現在は積極的な活動を停止中。

1996年5月に同じ障害を持つ長女・宇宙（うみ）を出産。＜安積遊歩氏HP内「自己紹介」より抜粋＞

＊1994年、カイロ国際人口会議で優生保護法と子宮摘出の問題をアピールし改訂への糸口を作った。（1996年に改訂され母体保護法と名称を変更）

著書

「癒しのセクシートリップ」（太郎次郎社）
「車イスからの宣戦布告」（太郎次郎社）
「女に選ばれる男たち」（共著、太郎次郎社）
「生の技法」（共著、藤原書店）
「自立生活プログラムマニュアル」（共著、ヒューマンケア協会）

「生きのびるためのデザイン」（ヴィクター・パパネック著）が書かれてから30年。この本が示唆したとおり社会の仕組み自体を再デザインしなければ、次世代が存続できない環境になりつつあります。

「他者の現実を自分のこととして想像する」という感性の欠如が、その荒廃を引き起こしていることを私達はわかりながら、立ちすくんでいます。

生きのびるということー

身体だけの話ではありません。

本当の心のままで、他者と繋がり

社会に影響を与え、自分以外のものに貢献する、そんな時、心は生きのびることが出来ます。

それは現実を変える力となります。

安積遊歩さんは、自らの葛藤に正面から向き合い正直に表現する勇氣を持っています。

そして他者の心の発露を

そのままに「聴く」大切さを知っています。

日々の暮らしに意識的であることが

豊かな人脈や現実を引き寄せ

社会への強烈なアプローチになっていくのです。

彼女の生き様に触れた人間は

自分自身の力を思いだし

社会デザインへの新たな気づきを得るでしょう。

知足（知足院）美加子



安積遊歩氏HPより

ピア・カウンセリング

ピア（仲間）・カウンセリングは障害を持つ人たちが自立を目指していくときに、その動機を力強く応援する道具である。障害を持つ人たちに対する差別・抑圧はあまりに深刻でひどいために、「自分がこの世界に存在していいのか」という自己否定感からなかなか逃れることができない。その深い自己否定感を覆し、あたりまえに地域で生きる生活を取り戻そうとするために、仲間同士で聞きあってサポートしあうのである。ピア・カウンセリングは障害を持つ当事者たちの組織、全国自立センター協議会が中心となって進めている。

＊安積氏はピア・カウンセリングにコウ・カウンセリング（再評価カウンセリング）の理論と手法を取り入れている。互いが時間を平等に分け（カウンセラーの優位性をなくす）、聴きあい（言葉の奥にある感情を）、聴いてもらうことの中で自分の人生を再評価していく。 ＊印説明編者

自立生活センター

アメリカの障害を持つ人たちは自分たちの助け合いのシステムをピア・カウンセリングと名付け社会的認知はもちろん、職業として信任も得ていたのである。私はこれを日本に導入しない手はな

いと考えた。（安積氏は1983年にアメリカのバークレー自立生活センターで研修を受けている）自立生活センターは障害を持つ人たちの生活が障害のない人の生活とまったく対等・平等であるためのサービスを提供する機関である。そのサービスの核として、ピア・カウンセリングを提供することになった。日本で最初のピア・カウンセラーたちの活動・活躍が始まったのである。自立生活センターは今、日本に百箇所前後ある。そこは、障害を持つ人が隔離された状況から抜け出し、自分の生きたい人生を生きていくための応援をする機関で障害を持つ人がそこで暮らしている場ではない。自立生活センターの意思決定機関である運営委員会の過半数は障害を持つ人である。つまり障害を持つ人が地域で生きていくために何が必要かの自己決定をきちんと反映し、当事者主体の運営ができるようになっている。

障害を持つ人たちは自己否定感を持つことが多い。しかし心の奥では、本当はどうしたいかを感じ続け保ち続けている。それを聞いてくれる人が必要なだけである。ピア・カウンセラーとはその心の奥で感じていることを言語化し、涙や笑いととも外に出すことを助ける人である。「その感じていることは正しいことなんだよ」と励ましながらかく事で、障害を持つ人の自己否定感がほんの少しずつ解かれていく。どの自立生活センターでもピア・カウンセリングは大事なプログラムとして提供されている。障害を持つ人の自立というのは、親元や施設の中で選択権と決定権を奪われたところでは実現しないことである。だからまず、自分の人生は自分のもので、いわれなき差別を受ける必要はまったくないのだと立ち上がることが非常に重要なことなのだ。

障害を持つ人の自立

国連の統計によれば、人口の10%は障害を持っている。日本の統計は障害を持つ人とは障害者手帳を交付されている人と言う認識があるので、人口の3%から5%の割合だが、それでも100人に3人から5人は障害を持っているのだ。「自分だけは障害を持つ子の親にはなりたくない」と思う気持ちは差別的というだけではなく、非常に非合理的でもある。私は娘の親として、そして同じ障害を持つピアとして、中途障害を持つ人はもちろん、すべての障害を持たない人にもその現実を認識して欲しいと考えている。そしてどんな命も祝福されて生まれることのできる社会を、ピア・カウンセリングを使って、さらに広く豊かに準備したい。

障害を持つ人の自立とは、動かない体を医療やリハビリで動かせるようになってからはじまることではまったくない。今あること体のままでどれだけの自由を勝ち取るかが自立生活の中身となる。それには介助者との関係づくりが大きな鍵となる。介助者との関係がうまくつくれば、ありとあらゆる事が可能となる。

出産と育児

私は40歳で娘を産んだ。長い間私は不妊症だと思い込んでいたので、はじめはただただ驚いた。しかしだんだんこれは奇跡だと感じていった。そう感じていくと、娘に障害が遺伝しているだろうこともますます積極的に考えられるようになった。そして、この子は私のように障害を持って生まれてくることで、この社会に様々な問題提起を行い、多様な人が生きることの素晴らしさを伝えてくれるに違いないと思っていった。

私の一番の仕事は、なんといっても子育て、いや、子に育てられる日々だと思っている。障害を持つ私が障害を持つ子を育てるといふ、それだけで十分価値あるというそのことに、友人も介助者もパートナーの彼も全面的に様々な手を貸してくれている。また経済的にも年金や手当等、存在を十全に認めて、所得保障もそれなりになされている。

また去年から介助料が支援費と変わり、介助者への所得保障もそれなりになされるようになった。（＊現在は障害者自立支援法によって利用量に応じて自己負担が重くなる「応益負担」が導入されている）障害があるから介助がなければ生活が成り立たない。その介助を必要とする障害を、迷惑や負担と考えるか、あるいは周りの人に仕事を提供できる最高のプレゼントと考えるか、考え方次第で福祉社会もずいぶん実現が容易になるはずだ、と最近は特に思っている。

つまり障害の重い人たちが地域の中に出てくれば出てくるほど、介助者が必要になる。その介助者がボランティアだけでは、障害を持った人が安心して暮らすことは出来ない。だからボランティアではなく、きちんとした賃金を介助者に提供できるよう、支援費制度がはじまった。支援費は障害を持つ人本人に入るのではなく、障害を持つ人を介助する人々の生活を支えるものだ。介助者を必要とする人が出てくれば出てくるほど、介助者（ホームヘルパー）が増えなければならない、つまり雇用は促進され、経済は活性化する。

障害と経済

障害を持つ人の問題は、すべての人の問題だ。いつでも誰でも障害を持てるわけだし、すべての人は赤ちゃんのとき、おしめを付けて寝たきりの最重度障害者だった。つまり生き延びるために母親をはじめとする多くの介助者を得なければならなかった。この母親をはじめとする多くの介助者には、介助料という賃金が全く支払われていない。そのことも私たち障害を持つ人たちが地域で介助を得ようとするときにただならぬ困難を強いるものとなってきた。つまり「家族にやらせておけばただなのに、介助者にお金を払うことは浪費である」というような感覚や考え方である。

経済的不況が社会問題化しはじめると、歴史は戦争を引き起こして経済の活性化を図ろうとしてきた。武器をつくり、消費し、最後には人の命まで「産めよ殖やせよ」ということでコントロールし、おびただしい命の浪費をもって、ようやく経済の回復を図ってきた。しかし同時にそうした方法が正しくないことも、多くの人たちによって気づかれてきた。戦後約60年、特に私たち障害を持つ人たちは、ただただ殺される側にいて続けてきたわけだが、この2～30年ほどようやく人権意識の高揚の中で、地域に人として平等に生きることを通して平和な世界の実現に貢献し、参加してきた。

私は障害を持つ娘を、平和の指標として存在して欲しいという強烈な願いを持って、この世界に産み落とした。思ったとおり彼女は7歳（2004年HP更新時）で多くの人たちの手を借り、その多くの人たちの中でも特に数人の人たちには、彼女の存在を通して介助料という形で賃金まで提供し、幸せに生活している。

不況の時代を乗り切る経済の活性化は、障害者や子どもやお年寄りの支援者に、働きに見合う十分な所得を提供することで必ずもたらされるに違いない。それと同時に真の豊かさの構築には、その仕事が尊敬と名誉に満ちた仕事であることを社会が十全に認識することが必要である。

命に寄り添う仕事

人類の歴史は核開発を通して、これ以上の惨劇はありえぬほどの惨劇を見ることが出来るところまで来てしまった。一人一人がそのことを自覚し、命を破壊するのはなく、命に寄り添いその傍にあり続ける仕事を選んで欲しいと思う。その仕事を通して世界は必ず幸せに平和になっていくだろう。この時代こそ、介助やサポートやケアをするという仕事をあらためて見直し経済の建て直しをそこから図りたいものだ。たとえばの話で定かではないが、東京都内のある区がホームレスの人たちに建設業ではなく、こうした分野の仕事を提供することを通して雇用率の上昇を図ろうとしているという。全く賛成だ。退職後の人たちも専業主婦も、そして若い学生達も、この介助という仕事でずいぶんの人たちが助かってきたと思う。それらを今多くの人たちに解放することによって、平和がもたらされることを繰り返し強調したい。

最近はこれらのことをよく考えているし、様々な場でよく話している。自分の仕事を意味がない、価値がないと感じながらも、ただただ時間に終わられてやり続けるよりは、一度人と関わる仕事をすべての人が（男性たちには特に）体験して欲しいものだ。そのことを通して世界は愛と平和のバランスを取り戻すだろう。

出生前診断

何度も何度も何度も繰り返して言うが、障害があることが不幸なのではない。障害があることで徹底的に生き難さを強い、差別を押し付け、隔離・排除してしまう社会を作り出していることが不幸なのだ。

もし私に障害がなければ、妊娠初期から超音波診断で繰り返し胎児の曲がった足の骨を見せられることで、圧倒的に不安を募らせたに違いない。そしてやはり生まれてきてもかわいそうな人生しか送れないだろうと、まるでその胎児の幸せのすべてを支配しているかのような錯覚を確信しただろう。その結果、すさまじいのちへの攻撃と自覚することなく、容易に胎児をおろしてしまっていたかも知れない。

差別は要するに、障害を持つそれぞれの人生を、あまりに知らないというところから起こるのだ。私は自分に障害があるので、出生前診断をされても不安どころか、自分が生きてきたノウハウを伝えられると思って、障害を持つ子が生まれてくることが、どこか楽しみですらあった。無知を超えることで、差別は必ず乗り越えられるのだ。

障害と環境破壊

（生殖補助医療や遺伝子工学について）科学的なことは素人の私には良くわからないし、わかってはいてもうまく表現できないことも多い。しかしそれでも発言しなければと、自分を励まし続けてきたし、続けている。何ととっても、遺伝子を問題にされることで殺される側に、私たちは確かにいるのだから。障害を持つ当事者とその家族にとって、遺伝子をいじってこの社会に障害を持つ人を生み出さないようにしようという方向性は、私たちに對する殲滅計画と思える。

地球環境がどんどん破壊され、ダイオキシンや環境ホルモンなど、人間の体に蓄積され健康を害するものが、どんどん増えつつある。そうした恐怖をすべてこれから生まれてくる胎児を選別することで、見ないようにしてしまおうという企てが、この社会には確かに動いている。

特に科学や医学の専門家と呼ばれる人たちが、その専門性にのみ心を奪われ、その道を追求することに人生の大半を費やす現実がある。つまり障害を持つ人の人生は、彼らにとってはまるで遠いところにあるが故に、常に『不幸』の二文字によってのみ認識されている。そのあまりに偏った認識＝偏見をもとに進んでいる医学や科学が、私たちに住みやすい社会を提供するはずはない。そうだとするなら、当事者として、素人であっても、何もわかっていないと指弾されようとも、おかしいことはおかしいと言い続けなければならない。それが出生前診断等において抹殺されていく障害胎児・あるいは障害のない胎児たちに対する愛情と、いま生まれ出たるものの責任であると確信している。

安積遊歩氏HPより抜粋

編集：知足美加子

<http://www.geocities.jp/yuhoumihide/yuho/>（2007年6月1日取得）

2007年 7月12日（木）

p.m. 2:30 ~ 4:00 参加費無料

NPO法人エスタスカーサ交流スペース

福岡市南区弥永2丁目17-1 tel/fax 050-6620-2460

Estasucasa



同日p.m.6:30~7:30 九州大学 芸術工学部・511教室（福岡市南区塩原4-9-1）にて高年次教養「市民参加の社会デザイン」（近藤加代子准教授）にゲストとして参加・講演されます。当日は、一般の方も参加できます（無料）。